

奈良県立高等学校入学者選抜検討委員会 これまでの主な意見(概要)

(高等学校の特色化の必要性)

・国が示す令和の日本型教育、これからの時代に必要な力を身に付けさせるための学校教育の在り方を教員一人一人が把握し、あの高校に行けばこんな授業が受けられる、と示すことができればよい。

・地元の高校から大学生となることを目指していけるように、魅力、活力ある高校づくりには賛成。両方叶えていくことは難しいことかもしれないが、必要なことだと考える。いろいろな選択肢が用意されているということは必要。

(高等学校の特色化と中学生の意識)

・特色選抜がはじまったときには、子どもたちの様子をみていると、行きたい学校という選択もあるが、少しでも早く決めたいという思いが強かったと思う。ただ、近年は、行ける学校や早く決まる学校よりも、行きたい学校という認識はある程度定着してきている。

・奈良県の子どもたちのアンケートでは、普通科を希望する子が80%ぐらいとなっている。特色選抜はいいと思うが、中学生で夢があるか、という点は難しいと考えている。特色を考えた高校選択は、子どもたちには難しいのではないかと思う。普通科を増やしてほしいという声が多い。

・中学校卒業の段階で自分の将来をしっかりと見据えられている子どもたちがどれほどいるか。高等学校の特色をしっかりと学ぶとともに、自分の分析をしたり、将来を考えられるような機会を持たせたりしていかなければならないと思う。

・奈良県の保護者の意識が、奈良、畝傍、郡山に行くことが1つのステータスになっているのではないかと思う。地元の高校よりもそれらの高校を選ぶ、そのような意識が強い現状があるのでは。高校入試は、小学校段階からも、特に保護者が注目している課題。

(公立・私立、県内・県外の選択)

・県内の高校において、上位の5校ぐらいの競争率が高い。学力の高い生徒が上位の県立高校の受検に失敗をしたとき、県内から県外へ行ってしまいう状況であると思う。県内に残って県内の教育を受けることにつながる体制が弱いと思う。

・生徒数も減っているので、私立の受検の合格者が多くなった印象がある。早くに合格を出されると私立に流れていってしまう。二次募集で試験を受ける普通科高校の子どもたちは非常に少なく、二次募集でも定員が割れてしまっているということが起こっている。何とか奈良県内で、行きたい学校に行ける方法はないかと思う。

・前回の再編で行ける学校から行きたい学校へとなったが、高等学校もそのような学校がつくれているのかということを考えていかなければならない。私学での実質授業料無償化の制度ができてから、公立は少々無理なところでも挑戦し、だめな場合は大阪・京都の私学に、という進路指導が行われているのではないかと思う。

(入学者選抜時における成績評価の在り方)

・中教審答申が期待している学力観を入学者選抜にどのように具体化していくか。あまり入試を利用するのはどうか、ということもあるが、中学校以下の教育をしっかりと評価して、高校に入ってからの学力、資質・能力というものをしっかりと評価できるようになるといい。

・奈良県の調査書は、2年3年が1：2となっている。1年からはじまり、そろそろ頑張りたいたいという2年生になり、3年生で更に頑張る、ホップ・ステップ・ジャンプのようになっているのは、昔は1年生の成績も調査書に入っていた時代もあったということを考えると、よく工夫された制度だと思う。